

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成25年度病虫害発生予報第6号（9月）について

このことについて、病虫害発生予報第6号を発表したので送付します。

予報第6号

9月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

主な病虫害の発生予報概要

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病	多	多	やや多
	紋枯病	少	並	やや多
	トビイロウンカ	多	多	多
	コブノメイガ	並	並	やや多
	斑点米カメムシ類	並	やや多	やや多
大豆	ハスモンヨトウ	少	少	多
	吸実性カメムシ類	多	やや多	やや多
かんきつ	黒点病	少	やや少	並
	ミカンハダニ	並	やや少	やや少
かき	炭疽病	やや少	並	並
	フジコナカイガラムシ	並	並	やや多
果樹共通	カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)	並 (前々年比*注①)	並 (前々年比*注①)	多
茶	炭疽病	並	やや多	少
	もち病	やや少	並	並
	輪斑病	やや少	やや少	並
	チャノコカクモンハマキ	少	並	やや多
	チャノホソガ	やや少	やや少	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや少	やや少
	カンザワハダニ	並	並	並
	チャノキイロアザミウマ	やや少	少	並
チャトゲコナジラミ	少*注②	—	やや少	
イチゴ (育苗期)	炭疽病	並	やや多	やや多
	ハダニ類	やや少	やや少	やや少

注①：果樹共通・カメムシ類の発生量の平年比は、年次変動が大きいため、現況及び9月の発生予報については、発生状況が類似している前々年比としている。

注②：チャトゲコナジラミの現況は前年比としている。

トビイロウンカが多発生ほ場では、早急な防除に努めましょう！

本年はトビイロウンカが多発生し、坪枯れが発生しているほ場が確認されていますので、ほ場での発生状況をよく観察し、発生が多い場合は、早急に防除を行って下さい。

(平成25年8月28日付 病害虫発生予察注意報第3号 参照)



株元の成幼虫



短翅♀成虫(拡大)



中齢幼虫(拡大)

水稻と大豆のカメムシ類の発生状況に注意して、防除を徹底しましょう！

本年は梅雨明け後、晴天・少雨の天候が続いたため、水稻ではクモヘリカメムシ等の「斑点米カメムシ」、大豆ではイチモンジカメムシ等の「吸実性カメムシ」の発生に注意して、適期防除に努めてください。



ミナミアオカメムシ



クモヘリカメムシ
水稻の「斑点米カメムシ」



ホソハリカメムシ



アオクサカメムシ



イチモンジカメムシ
大豆の「吸実性カメムシ」



ホソヘリカメムシ

<予想される向こう1か月の天候(平成25年8月24日～9月23日)>

平年と同様に、晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。降水量は平年より多いでしょう。日照時間は平年より少ないでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	40	40
降水量	20	30	50
日照時間	40	30	30

(福岡管区气象台 平成25年8月23日発表抜粋)

作物別発生予報

注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。

注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

【普通作物：水稲】

普通期水稲

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

発病株率 10.0%（平年 4.7%、前年 7.4%）

発病度 2.5（平年 1.2、前年 3.2）

発生ほ場率 48.9%（平年 27.4%、前年 31.8%）

発生状況は、地域・ほ場による差が大きく、発病株率100%の多発ほ場も一部にみられる。

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 葉いもちが発生しているほ場では、薬剤防除を徹底するとともに、適切な肥培管理に努める。

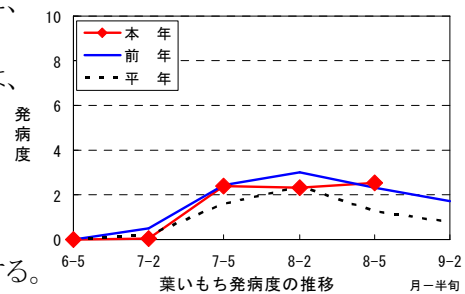
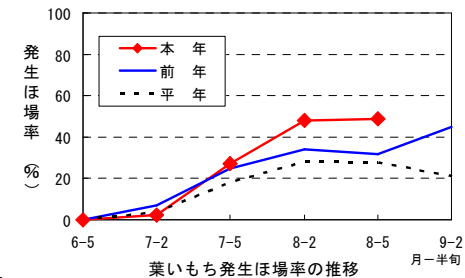
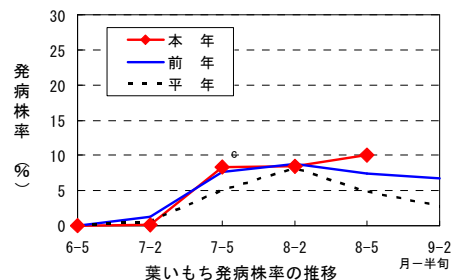
イ いもち病の常発地や葉色の濃いほ場及びモチなどの晩生品種では、発生状況を必ず確認し、今後の発生状況に十分注意する。

ウ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので使用基準を確認する。

エ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

オ 薬剤は「平成25年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

カ 農薬の使用および散布等に当たっては、P14の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病株率 2.3%（平年 6.8%、前年 3.0%）

発生ほ場率 34.0%（平年 36.6%、前年 22.7%）

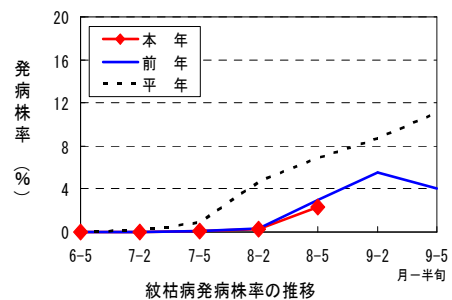
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 出穂期以降も、病斑の上位進展が認められる場合は防除を行う。

イ 薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので、使用基準を確認する。

ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。



3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

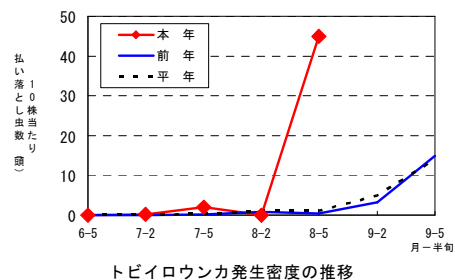
発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

10株当たり成幼虫数 45.1頭（平年 0.9頭、前年 0.4頭）

発生ほ場率 71.7%（平年 41.2%、前年 43.2%）



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高いとされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 本種は発生初期には低密度でも世代を経るごとに急激に増加するので、ほ場での発生状況を必ず確認する。

発生密度が要防除水準を超えたほ場では防除を実施する。

＜要防除水準：(中老齢幼虫の合計値)＞

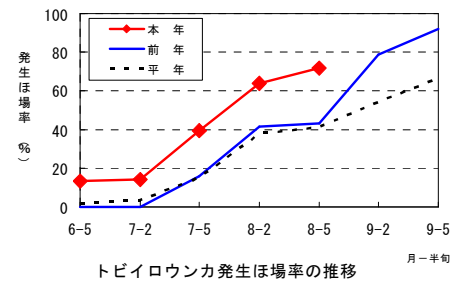
飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上

飛来後第3世代：100株当たり 1,000頭以上

(平成25年8月28日付 病害虫発生予察注意報第3号 参照)

イ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう注意して散布する。

ウ 薬剤散布に際しては収穫前日数に注意する。



4 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

食害株率 14.4% (平年 17.6%、前年 2.5%)

発生ほ場率 66.0% (平年 70.3%、前年 47.7%)

30㎡当払出し成虫数 3.9頭 (平年 6.1頭、前年 1.5頭)

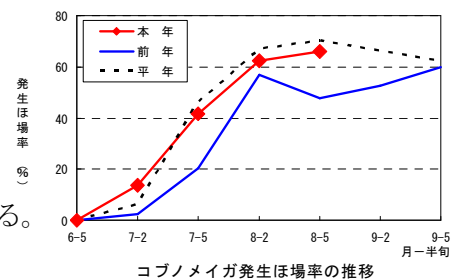
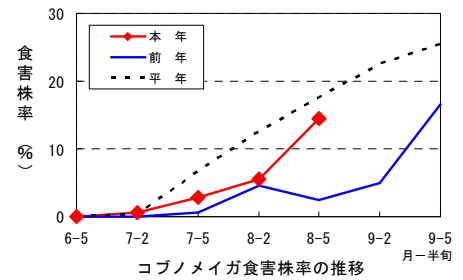
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア コブノメイガの防除適期は、発蛾最盛期から1週間後である。

イ 成虫は窒素過多の葉色の濃いほ場に集中して産卵する。

このため、ほ場により発生状況が異なるので防除に際しては注意する。



5 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査(水田内の片振り20回すくい取り)の結果、発生量は平年並であった(±)。

主要3種カメムシ (クモリカメムシ、ホハリカメムシ、シラホカメムシ)

20回すくい取り虫数 1.5頭 (平年 0.8頭、前年 1.5頭)

発生ほ場率 25.6% (平年 22.9%、前年 40.0%)

アカスジカスミカメ

20回すくい取り虫数 0.8頭 (平年 0.8頭、前年 0.7頭)

発生ほ場率 18.9% (平年 20.8%、前年 25.7%)

ミナミアオカメムシ

20回すくい取り虫数 0.03頭

(過去9か年平均 0.10頭、前年 0.00頭)

発生ほ場率 2.6% (過去9か年平均 3.5%、前年 0.0%)

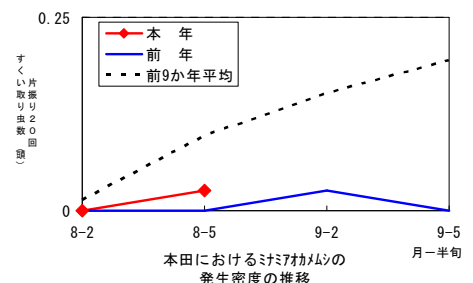
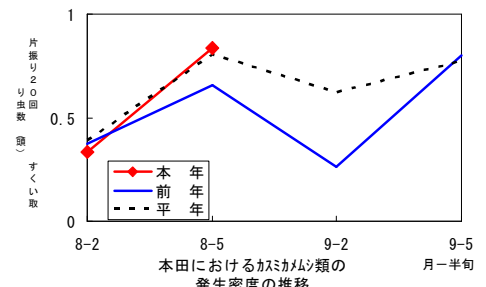
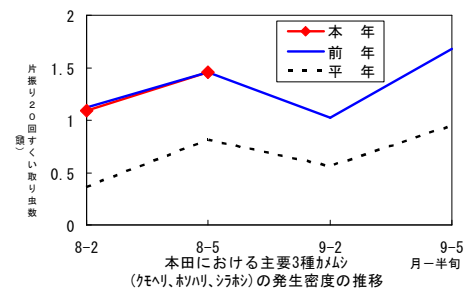
イ 県下4地点の予察灯における8月1半旬～4半旬の誘殺虫数は、主要3種カメムシ類及びアカスジカスミカメは平年より少なかったが、ミナミアオカメムシは平年より多かった(±)。

主要3種カメムシ(クモリカメムシ、ホハリカメムシ、シラホカメムシ)

21頭 (過去8か年平均 30頭、前年 16頭)

アカスジカスミカメ

165頭 (平年 507頭、前年 177頭)



ミナミアオカメムシ

42頭 (平年 13頭、前年 4頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高いとされている (+)。

(3) 防除上の注意

- ア 防除時期は穂揃い7～10日後である。
- イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。
- ウ 防除が実施されたほ場においても、カメムシ類の再飛来には十分注意する。

【普通作物—大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

25株当たり幼虫数 7.0頭 (平年 21.6頭、前年 1.2頭)

発生ほ場率 68.8% (平年 62.9%、前年 38.5%)

イ フェロモントラップにおける8月1半旬～4半旬の合計誘殺虫数は平年より少なかった(-)。

筑紫野市 346頭 (過去9か年平均 677頭、前年 266頭)

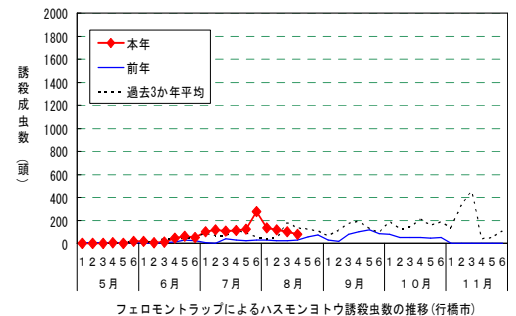
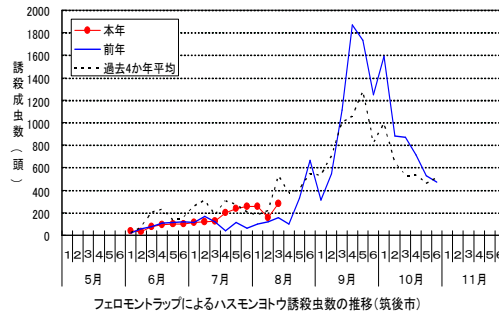
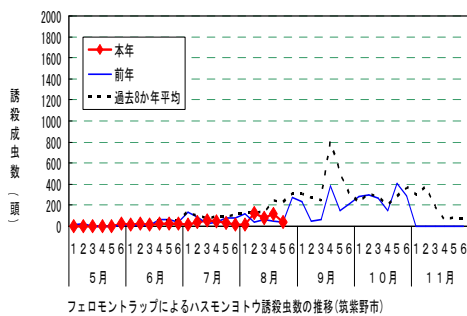
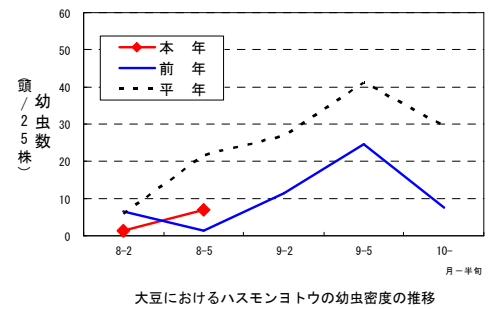
筑後市 929頭 (過去5か年平均 1,582頭、前年 474頭)

行橋市 434頭 (過去4か年平均 551頭、前年 102頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 分散前の若齢幼虫が群生している白変葉は、見つけ次第除去する。
- イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。
- ウ 防除適期は、フェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃である。
しかし、地域によって誘殺数に差があるので、ほ場における若齢幼虫の食害で生じる白変葉の発生状況を必ず確認する。
- エ 近隣にフェロモントラップが設置されていない場合は、病害虫防除所ホームページのフェロモントラップ誘殺状況(筑紫野市、筑後市、行橋市)を参考にする。



2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

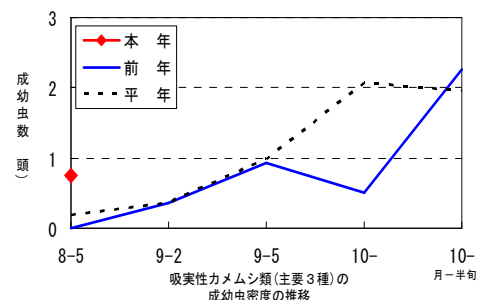
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった (+)。

主要3種カメムシ (アオカメムシ、イモヅカメムシ、ホバカメムシ)

25株当たり虫数 0.8頭 (平年 0.2頭、前年 0.0頭)

発生ほ場率 25.0% (平年 8.0%、前年 0.0%)



ミナミアオカメムシ

25株当たり虫数 0.0頭 (平年 0.04頭、前年 0.00頭)

発生ほ場率 0.0% (平年 1.7%、前年 0.0%)

イ 県下4地点の予察灯における8月1半旬～4半旬のミナミアオカメムシの誘殺虫数は、42頭 (平年 13頭、前年 4頭) で、平年より多かった (+)。

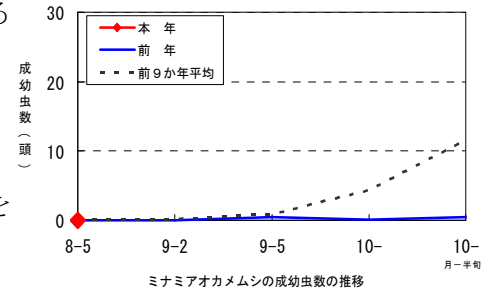
ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高いとされている (+)。

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は開花期後30日前後である。

多発生の場合は7～10日後にも防除を行う。

イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。



【普通作物—その他の病害】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
水稻 縞葉枯病	やや少	—	—	・ヒメトビウンカは、収穫後のイネ株等で越冬するので、収穫後は速やかに刈株をすき込む。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並。

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった (-)。

発病果率 0.2% (平年 4.0%、前年 1.7%)

発生ほ場率 16.7% (平年 49.7%、前年 58.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている (+)。

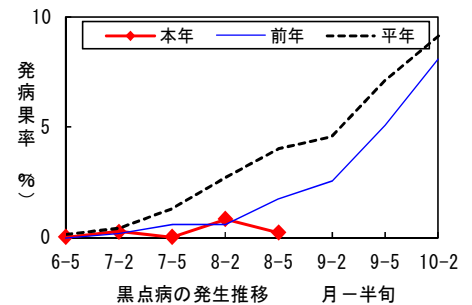
(3) 防除上の注意

ア 伝染源である枯枝は除去・処分する。

イ 前回の防除から25日後又は積算降水量250mmになった時点を目安にし、降雨前の予防散布を徹底する。

ウ 早生種は収穫期に入るので、防除に当たっては農薬使用基準を確認し、薬剤の選定に注意する。

エ 農薬の使用および散布等にあたっては、P14の内容を確認の上、適切に実施する (以下の病害虫についても同様)。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

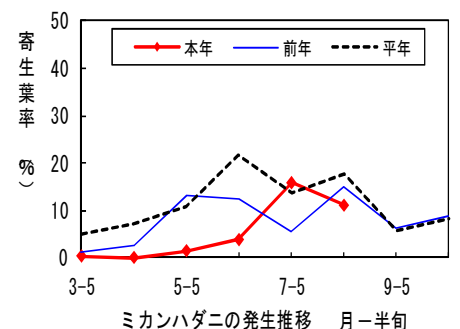
発生量：平年・前年よりやや少。

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった (±)。

寄生葉率 11.2% (平年 17.7%、前年 14.9%)

発生ほ場率 50.0% (平年 71.4%、前年 66.7%)



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている（－）

(3) 防除上の注意

- ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
- イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並。

(2) 予報の根拠

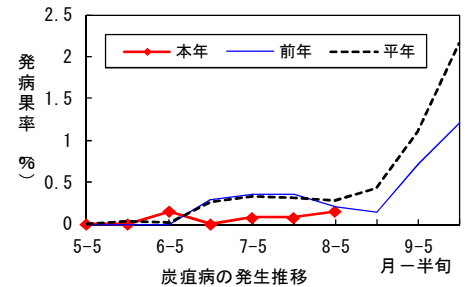
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。

発病枝率 0%（平年 0.3%、前年 0%）
発生ほ場率 0%（平年 10.6%、前年 0%）
発病果率 0.2%（平年 0.3%、前年 0.2%）
発生ほ場率 15.4%（平年 20.0%、前年 21.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている（＋）。

(3) 防除上の注意

- ア 伝染源である罹病枝や罹病果は除去・処分する。
- イ 台風等の強風雨が予想される場合や、罹病枝の多い園、本病に弱い品種（早秋）では、薬剤防除を徹底する。
- ウ 早生種は収穫期に入るので、防除の際は農薬使用基準を確認し、薬剤の選定に注意する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多。

(2) 予報の根拠

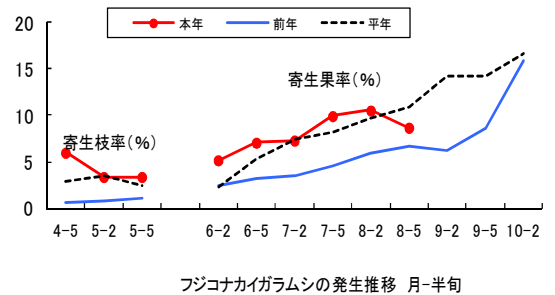
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生果率 8.7%（平年 10.9%、前年 6.6%）
発生ほ場率 84.6%（平年 71.8%、前年 85.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

本種はヘタのすき間や葉と重なった果実表面に寄生しているので、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する



【果樹：共通】

1 カメムシ類（チャバネアオカメムシ）

(1) 予報の内容

新世代成虫発生量 : 前年より多、前々年並
新世代成虫のヒノキからの離脱時期 : 前年より遅く、前々年並
9月上旬（一部の早い地域：8月下旬）

＜参考：チャバネアオカメムシの発生状況＞			
	本年	前年	前々年 ＜類似年＞
越冬量(頭/m ³)	0.7	3.2	0.7
ヒノキ球果着生量	中	少	中
発生型	—	7～8月多発	後期

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬におけるヒノキ球果の口針鞘数は、口針鞘数は平均9.6本で、前年より少なく、前々年並であった。地域により0.3～20.9本とバラつきがあり、多い地点ではチャバネアオカメムシがヒノキから離脱する目安とされる25本に近づいている(前年比：－、前々年比：±)。
- イ 8月5半旬におけるヒノキ球果のビーティング調査では、1地点当たりの寄生虫数は、成虫は前年より多く、前々年並であった(前年比：＋、前々年比：±)。
- ウ 県下5か所の予察灯における8月1～4半旬の平均誘殺数は403頭で、前年(1,030頭)より少なく、前々年並(304頭)であった(前年比：－、前々年比：±)。
- エ 8月5半旬の調査の結果、被害果は前年より少なく、前々年並であった(前年比：－、前々年比：±)。

カキの被害果率 0% (前年 0.5%、前々年 0.1%)

オ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(－)。

(3) 防除上の注意

- ア チャバネアオカメムシは、夜温が高い間は活動が盛んで、果樹園へ飛来し加害する。
- イ チャバネアオカメムシは広範囲に移動するため、広域一斉防除の効果が高い。
- ウ 樹種によって使用可能な薬剤が異なるので、使用基準や使用回数等を遵守する。
- エ 最新の果樹カメムシ類の発生状況については、病虫害防除所ホームページを参照する。

表1 ヒノキ球果の口針鞘数及びヒノキのビーティング調査によるチャバネアオカメムシの寄生虫数 調査時期：8月5半旬

調査場所	口針鞘数調査		ビーティング調査(頭)								
	ヒノキ球果		チャバネアオカメムシ								
	被害果果率 (%)	口針鞘数(本)	成虫数	幼虫数					計		
				1令	2令	3令	4令	5令	計	計	
本所管内	宗像市山田	100	20.9	1	0	0	1	0	7	8	9
	糸島市前原	80	4.7	5	0	0	0	0	1	1	6
	古賀市青柳	65	3.2	0	0	0	0	0	0	0	0
	久留米市田主丸町益生田	95	8.5	0	0	1	2	1	2	6	6
	久留米市田主丸町森部	100	13.2	1	0	0	2	2	2	6	7
	うきは市浮羽町小塩	85	11.6	0	0	0	0	0	0	0	0
	朝倉市長谷山	45	0.9	0	0	0	0	2	1	3	3
	朝倉市柿原	95	4.6	0	0	0	0	1	1	2	2
	朝倉市屋形原	60	2.5	1	0	0	0	0	0	0	1
	朝倉市宮野	100	18.8	3	0	0	3	1	1	5	8
	朝倉市三奈木	85	3.8	3	0	0	0	0	0	0	3
	朝倉市志波	85	5.0	4	0	0	0	3	1	4	8
	飯塚市入水	70	3.4	0	0	3	1	0	0	4	4
	筑紫野市吉木	100	10.3	6	0	4	3	0	0	7	13
	平均(14か所)	83.2	7.9	1.7	0	0.6	0.9	0.7	1.1	3.3	5.0
筑後支所管内	太宰田市上内	100	20.5	0	0	0	2	2	0	4	4
	みやま市山川町立山	100	13.0	0	0	0	1	0	0	1	1
	八女市立花町白木	100	14.9	2	0	0	0	1	1	2	4
	八女市立花町飛形山	100	12.8	30	0	0	0	0	1	1	31
	八女市黒木町野田山	100	15.6	5	0	0	2	0	0	2	7
	八女市黒木町今	100	13.1	10	0	0	0	0	0	0	10
	八女市黒木町本分	100	10.9	2	0	0	2	0	3	5	7
	広川町梯	100	16.7	11	0	0	0	2	4	6	17
平均(8か所)	100	14.7	7.5	0	0	0.9	0.6	1.1	2.6	10.1	
行橋支所管内	岡垣町上畑	100	20.2	0	1	1	0	0	0	2	2
	岡垣町戸切	100	13.2	3	1	7	3	2	2	15	18
	みやこ町犀川町木山	55	2.1	0	0	0	4	0	0	4	4
	上毛町唐原	50	2.8	0	0	0	0	0	0	0	0
	築上町寒田	45	1.8	0	2	2	3	1	0	8	8
	築上町本庄	15	0.3	2	0	0	0	0	1	1	3
平均(6か所)	61	6.7	0.8	0.7	1.7	1.7	0.5	1	5.0	5.8	
平均(28か所)	83.2	9.6	3.2	0.1	0.6	1.0	0.6	1.0	3.5	6.6	
前年	98.3	22.4	3.9	0.0	0.2	0.3	0.2	0.3	1.0	4.9	
前々年	84.3	9.7	2.3	0.2	0.7	0.9	0.5	1.0	3.3	6	

注1) 口針鞘数は20球果の平均である。

注2) ビーティング調査は、1地点5枝、1枝当たり5回のたたき落としの結果である。

注3) チャバネアオカメムシの卵から次世代の成虫になるまでの期間は、夏期の温度では約30～40日である。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
カキ うどんこ病	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・防除に当たっては、薬液が葉裏に充分かかるよう丁寧に散布する。 ・防除に当たっては、幼虫は葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、薬液を高圧で充分かかるように散布する。
ハマキムシ類	並	並	並	

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 1.5葉(平年 1.3葉、前年 7.4葉)

発生ほ場率 33.3%(平年 29.8%、前年 38.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

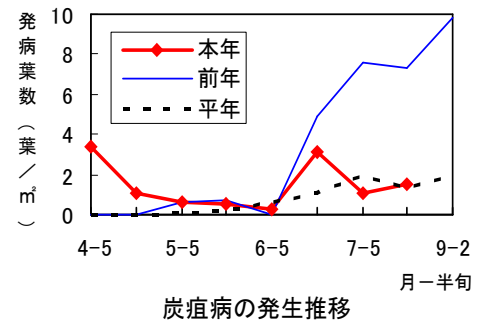
ア 秋芽での発生に注意し、新芽の3葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前に防除を行う。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、P14の内容を確認の上、適切に実施する。

(以下の病害虫についても同様)



2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病葉数 0葉(平年 0.1葉、前年 0.06葉)

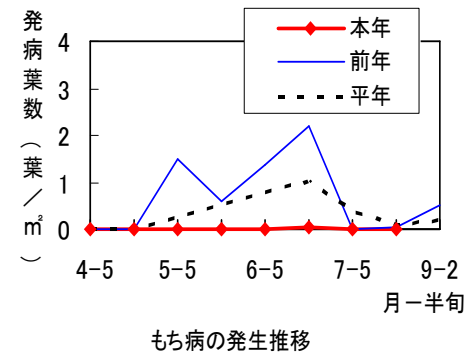
発生ほ場率 0%(平年 2.9%、前年 5.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 秋芽生育期に降雨が多いと、感染、発病しやすくなる。

イ 発生のおそれのある園では、萌芽から1葉期までに防除を行う。



3 輪斑病

(1) 予報の内容

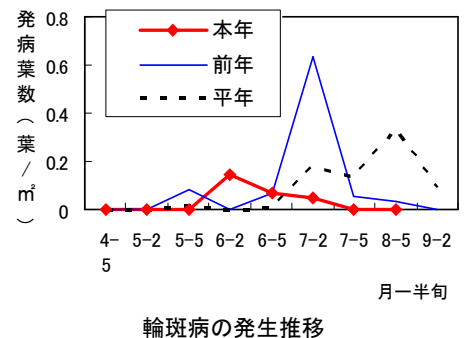
発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病葉数 0葉(平年 0.3葉、前年 0.04葉)

発生ほ場率 0%(平年 14.6%、前年 11.1%)



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(+)。
 (3) 防除上の注意

ア 葉や莖の傷口から病原菌が侵入感染するため、台風等の強い風雨の後では、傷口の増加によって感染が急速に拡大する場合がある。降雨後は速やかに(翌日までに)防除を行う。

4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

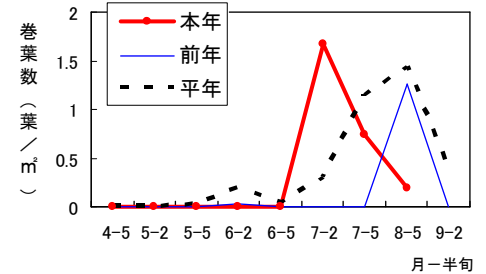
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

被害葉数 0.2葉(平年1.4葉、前年1.3葉)

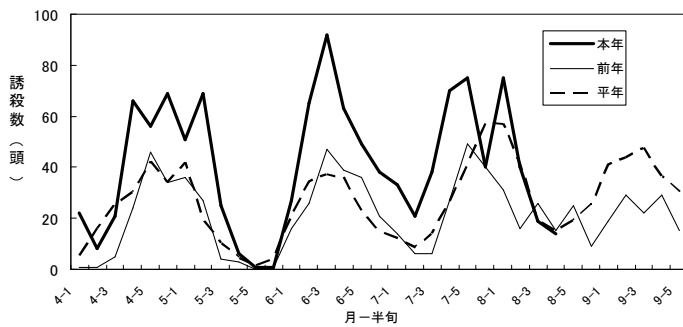
発生ほ場率 5.6%(平年27.6%、前年22.2%)

イ 本年の第2世代成虫のフェロモントラップ誘殺数のピークは、平年よりやや早く、誘殺数も多かった(+)

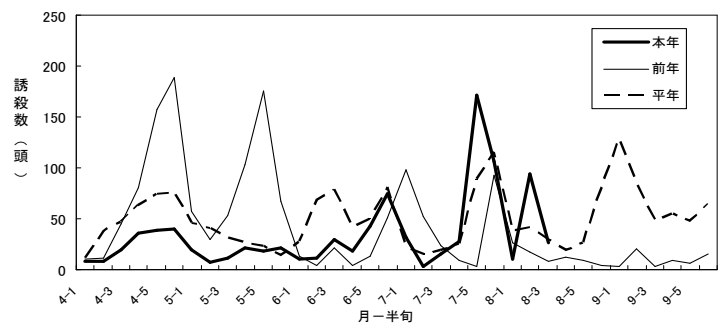
ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(±)。



チャノコカクモンハマキの発生推移



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(筑後市)



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(八女市)

(3) 防除上の注意

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、9月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

被害葉数 0.1葉(平年1.0葉、前年0.2葉)

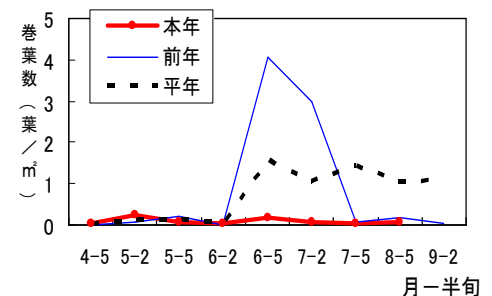
発生ほ場率 16.7%(平年20.1%、前年22.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(±)。

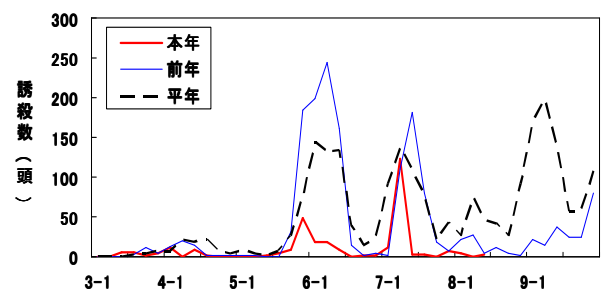
(3) 防除上の注意

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、9月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。



チャノホソガの発生推移



フェロモントラップによるチャノホソガの誘殺数(八女市)

6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

たたき落とし虫数 0.6頭(平年 0.7頭、前年 0.8頭)

発生ほ場率 38.9%(平年 53.5%、前年 83.3%)

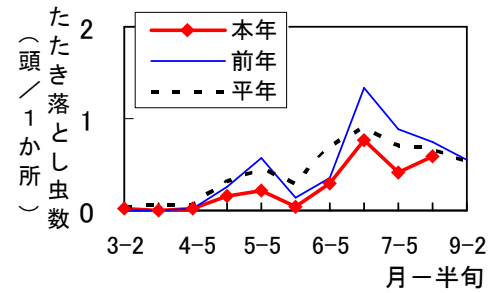
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(ー)。

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(B5版上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 多発後は防除効果が劣るので、多発する前に防除を行う。



チャノミドリヒメヨコバイの発生推移

7 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 3.1%(平年 3.6%、前年 5.0%)

50葉当たり虫数 4.1頭(平年 10.4頭、前年 9.6頭)

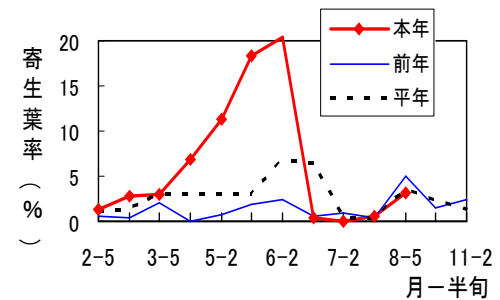
発生ほ場率 44.4%(平年 34.0%、前年 22.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(ー)。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



カンザワハダニの発生推移

8 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかつた(ー)。

たたき落とし虫数 2.6頭(平年 4.1頭、前年 1.7頭)

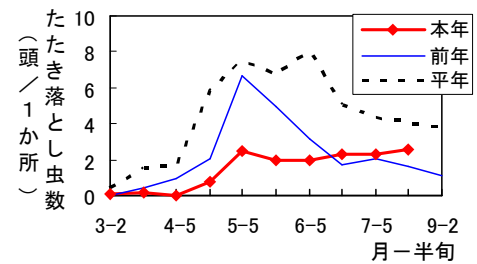
発生ほ場率 61.1%(平年 89.2%、前年 83.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(ー)。

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(B5版上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



チャノキイロアザミウマの発生推移

9 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや少

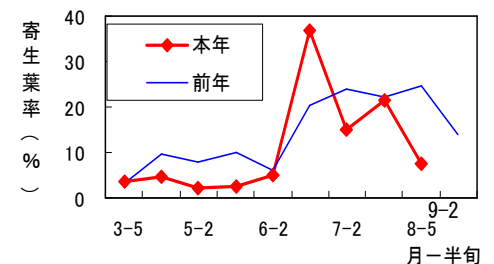
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は前年より少なかつた(ー)。

寄生葉率 7.7%(前年 24.8%)

1葉当たり虫数 0.2頭(前年 0.6頭)

発生ほ場率 44.4%(前年 44.4%)



チャトゲコナジラミの発生推移

- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(±)。
- (3) 防除上の注意
- ア 発生地域は県内の茶産地のほぼ全てに拡大している。本虫の発生が確認できない園でも、寄生している可能性が高いので、防除を行う。
- イ チャトゲコナジラミは年3～4回発生を繰り返す。防除適期は若齢幼虫期であり、親世代成虫の発生ピークが収まった頃であるが、標高によって時期の差が大きい。
平坦地の早いところでは、既に8月中～下旬に第2世代成虫の発生ピークが来ており、8月末～9月上旬が防除適期である。そして、10月上旬に第3世代成虫の発生ピークが来ると予想される。
山間地の遅いところでは、9月中～下旬に第2世代成虫の発生ピークが来ると予想される。
- ウ 今後指導機関が出す技術情報を活用し、適期防除に努める。
- エ 幼虫は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏に十分にかかるよう丁寧に散布する。

【野菜：イチゴ】

1 炭疽病(育苗期)

(1) 予報の内容

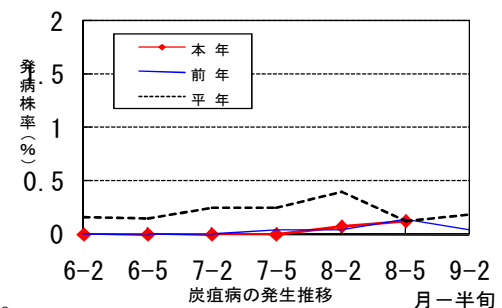
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
発病株率 0.12% (過去9か年平均 0.13%、前年 0.10%)
- イ 向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 罹病苗、感染が疑わしい苗及びその周辺苗は除去、処分する。
- イ 苗の選別には注意し、感染の可能性がある生育不良株は定植しない。
- ウ 定植後の枯死株は周囲の土ごと掘り取り、残渣を残さないようにして、ほ場外に持ち出し処分する。
- エ ビニルの被覆までは、ハウス内で新たに感染する恐れがあるので、定期的に予防防除を行う。
- オ 雨よけビニル及び寒冷紗被覆をしているほ場では風通しを良くする。
- カ 農薬の使用及び散布にあたっては、P14の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫においても同様)。



2 ハダニ類(育苗期)

(1) 予報の内容

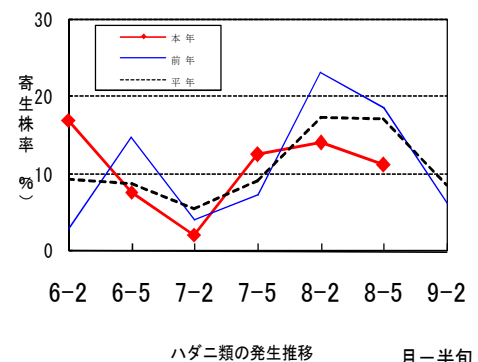
発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。
寄生株率 11.3% (過去9か年平均 17.2%、前年 18.7%)
- イ 向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(±)。

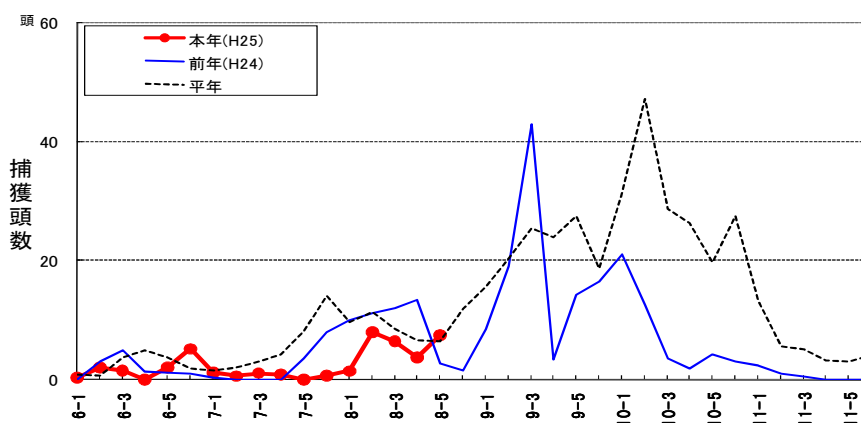
(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。
- イ ほ場内や周辺の除草を徹底する。
- ウ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ密封し、処分する。
- エ 夜冷短日や低温暗黒などの処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、本ほにハダニを持ち込まないようにする。
- オ 本ほで天敵を利用する場合、育苗後半は天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	並	並	やや少	<ul style="list-style-type: none"> 過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。 発生状況に十分注意し、防除を徹底する。 黄色蛍光灯を利用する場合、日没1時間前～日の出後1時間点灯する。
アザミウマ類	やや多	やや多	並	
チョウ目 (ハスモンヨトウ・材カガコガ)	並	並	やや少	
野菜共通				
ハスモンヨトウ	少	少	並	<ul style="list-style-type: none"> 若齢幼虫は群生しているため、かすり状の葉を見つけ次第、除去・処分する。 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと（以下の害虫についても同様）。 薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。 早期発見に努め、初期発生の際に防除を徹底する。
オオタバコガ	並	並	やや多	
コナジラミ類	並	並	並	



トマト苗トラップでのタバココナジラミ類捕獲頭数の推移 (筑後市)

月一半月

福岡県病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka/>
 電子メール byougaichuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では農薬の安全かつ適正使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・有用昆虫・河川等に対する配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬ラベル確認の徹底

(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数・有用生物〈みつばち等への影響〉)

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 散布前における情報提供の実施

(散布区域に近接するほ場、住宅地、養蜂等の関係者、他)

3 散布時には近隣作物や住宅地等周辺への飛散防止を徹底

- ・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
- ・飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
- ・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意

4 水田除草剤や本田粒剤は、使用后7日間の止水を遵守

- ・落水・かけ流しをしない。

5 散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を3回洗浄

6 防除履歴の正確な記帳

- ・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳

7 空容器の処分

- ・空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。
また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。